

# 研修レポート

令和5年7月20日

島田 正彦

## 徳島県上勝町

タイトル： ZERO WASTE タウンについて

7月12日 徳島県上勝町訪問。

人口1,500人弱の小さなこの町が、全国的に名をとどろかせたのは1986年。

町の半数を占める女性や高齢者たちが活躍できる仕事はないかと模索中、町の山々にある葉っぱを“つまもの”として発売しようと発案されたのが葉っぱビジネスである。ひとりで1,000万円を稼ぐおばあさんたちもいるという。これを機にメディア関係が殺到し、一躍『時のまち』となった。

今回視察の目的は、2003年に自治体として日本初の「ゼロ・ウェイスト宣言」を行い、現在リサイクル率80%以上を達成している上勝町独自のシステムを学ぼうということだった。

まず、住民がごみをゴミステーション1個所に持ち込むため、ゴミ収集車はない。また、生ごみは各自で堆肥などで処理し、食品の入った

容器は洗い乾かして持ち込むため、ゴミステーションはごみ収集所独特の嫌な臭いは全くない。

ゴミステーションでは、13種類45分別にする。これだけ細かく分別している自治体はなく、全国、世界からも注目されるに至った。

しかし、高齢者の多いこの町でのアンケートの回答には面倒だという正直な意見も多くあるというが、東員町の自治会2つ分の規模だからこそ出来たということも否めない。

今や葉っぱビジネスとゼロ・ウェイストの取り組みは、この小さなまちの大きなブランドとなった。

ただ、ゼロ・ウェイストの視察者を増やし、多くの人がこの町に足を運んでもらい、町のPRをパンゲアという会社が一手に引き受けるという流れは、あまりにビジネス色が目立ち過ぎ、少し違和感を覚えた。

私が今回の視察で感心した点は、まだ使えるものをリユースするために事前に持ち込みが出来るシステムがあること。又、再利用したい人は町内外問わず持ち帰れる。ごみを削減する最たるものだと確信している。当町も、粗大ごみ置場を見渡すとまだまだ使用できる陶器、植木鉢、スーツケースなどが多々見受けられる。

これらを月1回～2回程度、日程を決めて自由に持ち帰れる日を開催してはいかがでしょうか。ものの命の大切さを訴え、その機会を提供する。このようなスタイルのごみ削減方法もこれからは有意義ではないでしょうか。担当部署にも提案していきたいです。



## 研修レポート

令和5年7月20日

島田 正彦

### 徳島県庁健康づくり課

タイトル： 健康ポイントアプリについて

7月13日 徳島県庁にて健康ポイントアプリ「テクとく」についての説明を受ける。

このアプリ実施の起因は、徳島県が全国10万人比で糖尿病死亡率全国1位（H29年）であること。この汚名を返上すべく県を挙げてのプロジェクトとなったようである。

どの地域においても食生活の特性はあるが、こちらの土地柄からみて魚食文化で健康的な食生活かと考えがちだが、野菜の摂取量が目標量に達していないことや、運動習慣者の割合が65歳以上に比べ20～64歳が低いという現状などから、令和元年テクとくアプリの開発に至った。

企業との連携を増やしつつあるが、県人口70万人中令和5年現在会員は27,300人と約4%弱。まだまだ浸透に時間を要するようだ。

このように県全体の大きなプロジェクトを進めていくには、地区自治体の認識とその必要性を共有することが重要である。

会員の60%近くが40代、50代、60代で少し偏りがあり、若年層への呼びかけが不可欠である。

健康管理は自身が自覚しない限り成り立たず、ポイントのインセンティブなどではモチベーションアップは難しいという現状も把握できた。

東員町の健康寿命が男女ともに県下上位になっているのは、サークルや運動クラブ、幅広い趣味で、自ら外に出て活動しているからで、フレイル対策等をしっかりしていれば、元気な高齢者の多いまちは継続できると確信しました。